

# ヤノケンの お役者修行

俳優人生こぼれ話パート

お役者修行を書き始めてから回数もかなり重ねてきた。思い出やエピソードも順不同とはいえ本当に沢山あるんだなと改めて感じてしまうのはそれだけ年を取ったということでもある。小学校1年生の時に「劇団若草」に入団してから40年余り業界に携わってきたのだから当たり前といえばそれまでだが。前にも書いたが、思い出すたびに本当に素晴らしい俳優達と共演させて貰ったなとつくづく思う。そこで今回は共演した俳優達の断片的な思い出をほじくり返して紹介することにした。

最近あるテレビ番組で個人的に懐かし

い俳優を見かけた。それ以来、続けて懐かしい人達を見かける機会が多くなったので何かの符合でもあるのだろうか。なんて考えていたら、大変親しくしていた「青春シリーズ」の助監督、その後監督になってからも仕事を通じて親交を深めていた『土屋統吾郎』氏が亡くなった。私は、亡くなる半年前に『土屋』監督が演出する芝居に演出補的な感じで関わっていたので、この突然の死には驚いたし、かなりショックを受けた。しかし、これまで関わった俳優達や業界の人達の大半が大先輩だから鬼籍に入られる方が多くなるのはしょうがないことなの

だろうが、お葬式の回数が増えるのは余りいい気がしない。酒好きな『土屋』監督のことだから、あの世でもきっと大酒を飲んで鬼籍の先輩達の誰彼構わず掴まえてからんでは大笑していることだろうと自分を慰めている。ご冥福を祈る（合掌）。

テレビで見かけて特に懐かしかったのは子供の頃劇団で一緒だった女優さん。今でも現役で頑張っているのは知っていたが、日頃余りテレビドラマを見ない私にとって大変懐かしかった。もともと「劇団若草」というのは女優を輩出することではかなり評判が高かった。因みに主だった出身者を上げてみよう。先ず山城新吾の奥さんだった『花園ひろみ』、緒方拳の奥さん『高倉典枝』、昼メロのヒロイン『北林早苗』、ここまでは私より人生の先輩。劇団同級生からは大橋巨泉の奥さん『浅野順子』子役時代は『浅野寿々子』といった、名子役といわれ黒澤映画で賞をとった『二木てるみ』、北極圏の到

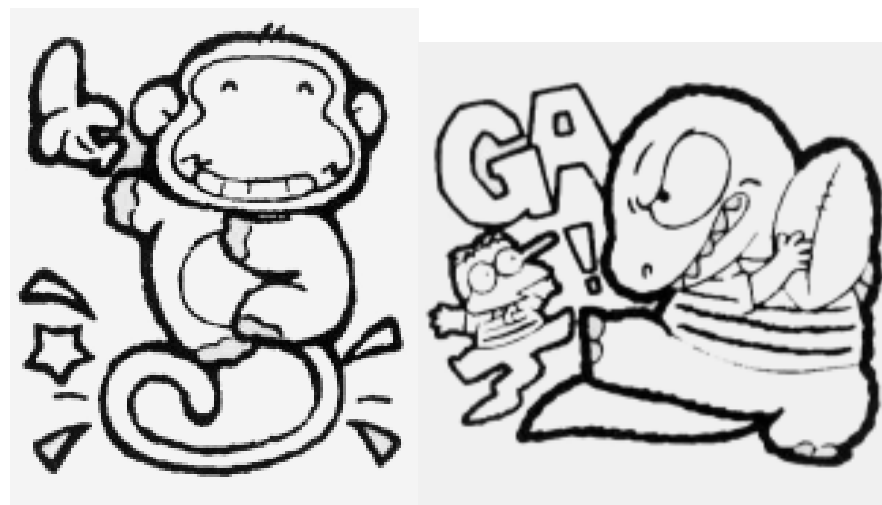
達で話題になった『和泉雅子』、杉良太郎の相手役でお馴染みの『葉山葉子』、いつまでも可憐な『酒井和歌子』、故坂本九夫人『柏木由紀子』。同級生ではなかったが青年部から出てハリウッド映画に抜擢され、最近では違った意味でお騒がせな『島田陽子』。後輩達からは、ちょっと変わった雰囲気演技で今猶健在な『桃井かおり』、俳優村井国夫の夫人『音無美紀子』などなど。児童劇団としてはかなりの輩出量といえよう。残念ながら最近はあまり芳しくないようだ。

以上あげた女優の中でも特になつかしいのは、やはり同級生として劇団のレッスンを共に受けた連中だ。同年代なのは『和泉雅子』『柏木由紀子』『葉山葉子』の三人。『二木てるみ』『酒井和歌子』『浅野順子』達は年下だったがクラスは同じだった。皆さん幼馴染で懐かしいが一番印象深いのはあるエピソードを通じて強烈に覚えている『柏木由紀子』の負けん



気の強さだ。こんなことがあった。その頃レッスンは毎週日曜日で、演技・台詞・発声と日本舞踊・洋舞（クラシックバレエ）と声楽（歌）が基本レッスン。『柏木由紀子』はその当時から眉目秀麗な女の子だったが、おとなしくて余り目立つ存在ではなかったと記憶している。声楽の時間のことだった。「杉浦」先生といって、恐いというよりちょっとヒステリックな男の先生で生徒の評判は頗る悪かったことを覚えている。私は授業をさぼる“悪がき”の代表だったから先生に好かれる訳もなく、当然嫌われていたし、私も嫌いだった。「杉浦」先生は、まじめで出来のよい子に優しくかったから、私達悪がき連はひたすら反抗的に接していた筈。ところで『柏木由紀子』だが、あまり活発ではなかったから、それまで「杉

浦」授業で指名され皆の前で歌う機会がなかった。だから彼女は歌が上手なのか下手なのか同級生の誰も知らなかったのだ。そしてある日それを証明する時が来た。一年に一回の試験（単位の取得）が近かったから私も授業に参加していてその現場に居合わすことができた。指定曲を歌い出した彼女の声は、普段の存在通りか細く、今にも消え入りそうに恥ずかしげに聞こえた。私の当時の心情としては、目立ちたがりの多い役者の卵達の中にあって、可愛いけどおとなしい彼女の存在は決して疎ましいものではなく、色白で当時からクリっとした大きな瞳は大変印象的でむしろ好感を抱いていたのではないかと思う。突然「杉浦」先生のピアノの音がガーンと響いて止まった。先生の顔は成田山のお不動様さながら赤く



強張っていた。次の瞬間「やる気がないなら授業に出なくていい！」教室中に響く先生の怒声。私は『柏木由紀子』がいつ泣き出すかそればかりが気になってじっと見つめていた。必死にこらえている彼女の目がほんの少し光ったように感じた時「もう一度やらせて下さい」と彼女の口は言っていた。だが先生の答えは非情にも「もういい、時間の無駄だ。席に戻れ」だった。彼女は必死に涙をこらえ、唇をかみ締めるように席に戻る、一瞬先生をキッと睨んだ彼女の瞳を私は見逃さなかった。その後1ヶ月以上も彼女はレッスンに出てこなかった。クラスの中ではそろそろ噂が立ち始めていた。曰く「退団したらしい」「恥ずかしくて来られない」「あんなに言われたらやめる」などなど、しかし私にはそう思えなかった、確たる自信はないが、最後の彼女の顔が「退団する」とは思わせない何かがあったのだと思う。特別に仲が良かった訳ではないが、住んでる所が割と近かつ

たことと、何よりも可愛いのおとなしい彼女に好感を持っていたことが大きく作用していたのだろう。やがて彼女が現れた。そして件の「杉浦」授業、先生の性格上指名するのは目に見えていた。その日興味を持っていたのは私だけではない、クラスの大半が成り行きを見守っていた。そして私達は目の当たりにしたのだ。そこには、以前の『柏木由紀子』ではなく、楚々として美しく、しかも朗々と歌う一人の少女が輝いていた。自信を身に纏った彼女は私に一人の少女歌手を連想させた。天才少女歌手として一世を風靡した『小嶋くるみ』。小学校の高学年になった『小嶋くるみ』は少しの間「若草」にいてレッスンを受けていたことがあった。私と同年だったので同じクラスになり、何故かレッスンの相手役を指名されることが多かったから印象が深かったのだろう。当時少女歌手としてすでに大スターだった『小嶋くるみ』は、歌のレッスンは受けなくて、演技と台詞の



レッスンだけに参加していた。愛くるしいチャーミングな顔や元気な歌声とはうらはらに、劇団での彼女はとてもおとなしい控えめな子だった。劇団ではどうしても特別扱いされ、クラス内でも話相手が少なく、特に同性の友達ができにくかったようだ。ところが私にはそういう人達に好かれる傾向が当時からあったようで、クラスメイトの中でも一番話したのは私だと思う。その『小嶋くるみ』を彷彿させるものがこの時の『柏木由紀子』にはあった。勿論この事件の時『小嶋くるみ』はすでに「若草」を辞めていた。この日すっかり変身し、課題曲と練習音階を見事に歌った『柏木由紀子』はクラス中の人気者(特に男子の)となり、「杉浦」先生のお気に入りに加わった。私の心情は、嬉しいけどちょっぴり妬ける

し、鼻の奥がムズムズしてくるし、胸は苦しくなってくるしと結構複雑な気持ちだったことを覚えている。その後、彼女の変身経過を知るにいたったのは、女友達に彼女が語ったことが自然に伝播したからだ。それによると、彼女は劇団を休んでいる1ヶ月間、別の音楽教室に通い詰めて練習を重ね、自信をつけたそう。外見からは想像もできない彼女の負けん気の強さに当時の私は畏怖に近いものを感じ取っていたのかもしれない。その後年月を重ねお互い大人になり俳優同士として何度か共演もした。その度に私は、彼女の涙をこらえた可憐な瞳に一瞬宿った力強さ、楚々とした美しさに隠された芯の太さと負けん気の強さを知っているのはきっと私だけだろうと密かに優越感を感じて楽しんでいたのである。し

かしその密かな楽しみもやがて万人の知ることとなってしまった。皆さんもご存知の通り彼女の夫「坂本九」氏は飛行機事故により御巣鷹山の空に短い生涯を閉じた。その後の彼女の健気な処し方が彼女の強さを表していることを皆さんもきっと納得されるだろう。悲劇の未亡人として、母として、猶、美しさを保ち続け女優として活動する彼女の芯の太さは、少女時代にすでに培われいた強さに他ならない。思いだしてみると、あの頃私は『柏木由紀子』にほのかな思いを寄せていたのかもしれない。そういえば彼女が『坂本九』氏と結婚するにあたって交際を始めるきっかけもおおよそ彼女の外観からは感じられない積極さだったと聞いていた。私は、『坂本九』主演の「フジ三太郎」で九ちゃんとも共演したし、ある国会議員を励ます会の司会を頼まれて軽井沢に行った時のゲストが九ちゃんですその時にも夫妻に会っている。そんな

こんなで、特別親しくしていた訳ではないが、なんとなく『柏木由紀子』については感慨もひとしおなのである。

話は変わって、子役出身の俳優で子役時代印象的だった何人かについて思いだしてみる。まず思い浮かんだのが『ジュディオング』。フジテレビの「おらあ三太だ」という多数の子役が出演していた番組があった。主演の「三太」は劇団若草の同級生『渡辺篤史』、その同級生役の中に『ジュディオング』や私がいた。子供が主役の物語なので収録は毎回にぎやかだった。数多い子役の中で図抜けて光っていたのがジュディだ。台詞覚えの良さ、頭の回転の速さ、臨機応変というべき演技力、何より持ち前の明るさとテンポのいい活舌(台詞の言いまわし)とても年下の女の子とは思えなかった。その頃ビデオの収録は今のように各シーン毎のブロック収録ではなく、1時間ドラマの場合で2分割か3分割。編集技術も稚



拙だったから、途中でNGをだすとそのブロックの始めからやり直し。だからNGをだしたりすると共演者達から顰蹙を買うハメになる。そんな時頼りになったのがジュディだった。いつもワイワイガヤガヤうるさい子役達にあって、その場に則した冷静な判断力と対応力。しかも邦人ではない彼女が、台詞とはいえ私達よりきれいな日本語を話すにいたっては何をか言わんやである。皆さんは歌手としての彼女の印象が深いだろうが、私にとってみればいわゆるマルチタレントの走りといえる彼女に女優としても大いに活躍して貰いたいものである。

次に思い浮かぶのは『中山千夏』だ。残念ながら私はあまり記憶に残るような共演の機会がなかったが、子役時代から彼女は才媛の呼び声が高かった。決して美人とは言えないが、どこにでもいそうで、しかも異性・同性に関わらず好かれやすいタイプの澁刺とした女の子だっ

た。その頃の彼女を見て私がちょっと気になったのは、周囲の期待に添うためにかなり無理していたような印象を受けたことだ。しかしこれは私の全くの杞憂であった。その後の彼女の天賦の才はどうやら子供時代から身に備わっていたようだから。勿論彼女もマルチタレントの代表格といえる。芝居の巧さはさることながら、自作自演で歌は歌うは、本は書くはのマルチぶりはスーパーガール(今はスーパーレディ)という称号がピッタリの才女である。

度胸の良さと独特な演技力をすでに十代の前半から身につけていた女優二人にふれておく。一人は「劇団若草」の後輩でもある『桃井かおり』。幼少の頃から天才バレリーナとして将来を嘱望されていた彼女は足腰を傷めてクラシックバレエを断念したそう。しかしそのおかげであの独特な演技で多くの人達を魅了しているのだからそれが彼女の宿命だったの

だろう。彼女とは結構共演しているし、劇団の後輩ということで良く遊びに連れて行ったりしていた。最初の共演作は『江利チエミ』主演のフジテレビ「花子ちゃん」という学園物での高校の同級生役だった。あの物憂い話し方と感情の起伏を一定の振幅で表すような独特な芸風の一旦は当時すでにあった。普通ではない反応のし方は普段でも見えていたし、何に対しても物怖じしない強さは幼少時の外国生活(バレエ留学)が大きく影響しているのではないだろうか。頑固さと身勝手さを持ちながらそれらを包み込むあの茫洋とした強烈な個性、何とも不思議な女優ではある。

もう一人は元『明石家さんま』夫人の『大竹しのぶ』。彼女の子役時代(デビュー当時)に私はもういっばしの大人で、中学生の彼女と共演したのだ。この作品は私が師事していた故「児玉進」監督がメイン演出のテレビドラマだった。彼女の演技を最初に見た時の印象は決し

て芳しいものではなかったが気になる芝居であったことは確かだ。期待を裏切られるというのか、不安感を与えられるというのかとにかく見せられてしまう、そんな感じ。「児玉」監督の家で初めて彼女に会った時は、唯の可愛い女学生で今のようにおっとりした、悪く言えば“たるい”印象は受けなかった。しかし撮影現場での彼女は違っていた。妥協しない確固たる自信は当時から光っていて、その場の雰囲気占有する強さをすでに備えていたような気がする。個性的な面ばかりが芝居に反映しているように見えるが、なかなかどうして大変巧い女優の一人であることは間違いない。これからもその演技力を駆使して大いに観客を悩ませて貰いたいと願っている。

今回は何故か女優に偏ってしまったが、私は男であるから女性に興味があるのは当たり前なことなのでお許し願いたい。いずれ男優の個性などについて思い出す機会もあるだろうから。